



白の皇国物語 13

ALPHAPOLIS

白沢成亥
Inui Shirasawa

アルファライト文庫 



グロリエ

〈新生アルマダ帝国〉
第十三皇女。通称“戦狂姫”。
先の戦いで、レクティブァール
に敗北を喫した

イレスティア

〈ウィルマグス〉で自動人形
部隊の作戦行動を立案する
主席機兵参謀。機人族

ヘスティ

皇立特務機兵研究院の
研究員。研究一筋で
世慣れしていない

リーファ

〈ウィルマグス〉にある
四界神殿の主教。
総大主教ミレイディアとは
学生時代からの付き合い

タキリ・イチモンジ

第五代皇王ナギ=
イチモンジの末裔。
レクティブァールの侍従武官

レクティブァール

本編の主人公。
〈アルトステティア皇国〉
摂政にして次期皇王。
概念兵器である皇剣の所有者

主な登場人物

第六章

観艦式

252

第五章

諸国鳴動

200

第四章

白雪

177

第三章

正義の在処、悪の苗床

111

第二章

北方辺境領

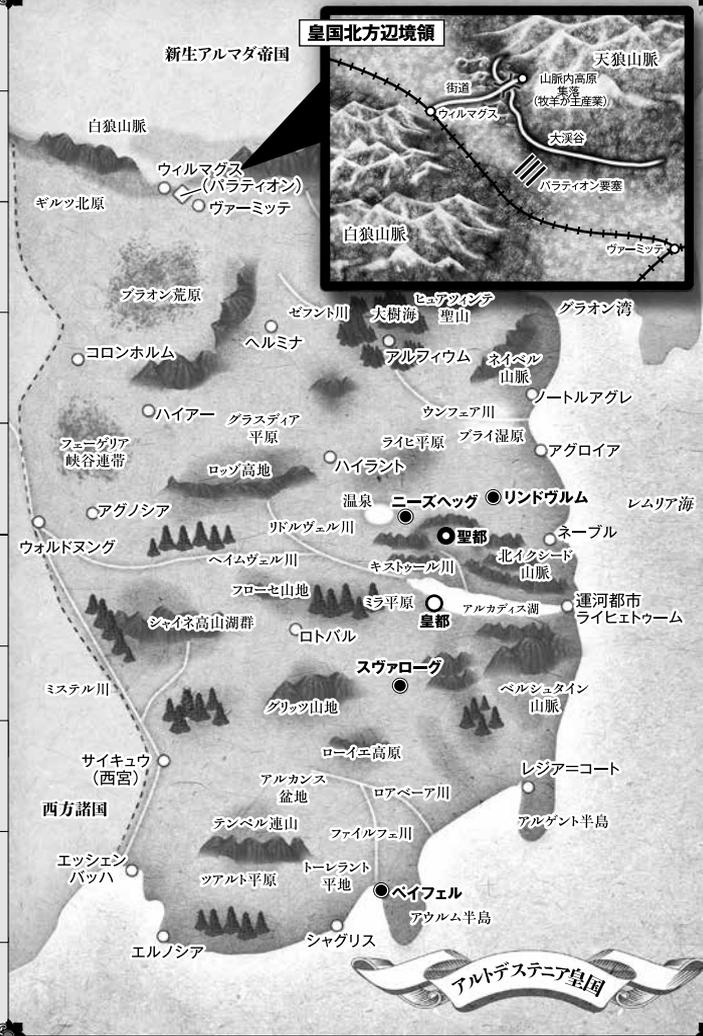
67

第一章

それは日常の一角

9

目次



この世界に真の正義など存在しないだろう。

だが、人が「これぞ己が正義」と信じられるものは存在する。

そして、己の正義を全うする我々の有り様こそ正義だ、と信じる者たちが『いる』。

私たち軍^{ぐん}禄^{ろく}を食^はむ者が命を懸けるには、それで十分だ。

第一章 それは日常の一角

皇国北方直轄領（ウェイルマゲス）。

その隣——かつて帝国が皇国侵攻の切り札として建造した巨大攻城砲の跡地に、皇国軍が大規模基地を造り上げたのは、単に帝国への当て付けだけが目的だったわけではない。堅牢な地盤を持ち、大型建造物を造るのに適した地だったからこそ、そこが選ばれたのだ。ただ、帝国内部にはそれを皇国の挑発と受け止める者も少なくなかった。

そうした国家間の思惑は別にして、基地では今日も多くの軍人たちが動き回っている。その中に、一際異彩を放つ人物がいた。

「ぬわー」

情けない悲鳴と、どすんという低い音が格納庫内に響く。白衣を着た女性がひとり、盛大に尻餅をついて涙目になっていた。

その声と音に、庫内にいる作業衣姿の軍人たちが顔を上げ、続いて彼らのひとりが声を

張り上げる。軍人らしく、よく通る声だ。

「博士がまたコケたぞおおおおおおお!!」

わーっ、と格納庫内が騒がしくなり、すぐさま、すっ転んだ女性のもとに担架が向かう。

「博士！こちらに！」

繋ぎの上半身ははだけ、隆々とした筋肉を見せている力自慢の整備士ふたりが、様々な端材を組み合わせて作った担架の前後で膝を突く。力強い笑みから覗く白い歯が輝いた。

「さあ！」

「どうぞ！」

ムキイツと上半身の筋肉を盛り上げ、さらに大胸筋を波打たせ、ふたりの整備士は担架を示す。

「え、えーと……」

女性——ヘステイ・ラ・フリーガシンは、笑顔が引き攣りそうになるのを理性により全力で制御しつつ、担架とふたりの筋肉塊の間で視線を彷徨させた。

「さあ!!」

「さあさあさあ!!」

平均して一日三回は担架の荷物になっているが、ふたりの筋肉塊は常に同じ姿で彼女の前に現れる。寒くないのだろうかとか心配したのも初日だけで、今となってはこの暑苦しい

肉壁をどうにかして視界から遠ざけたくて努力を重ねるようになっていた。

その努力のひとつが「転ばないこと」というのが、彼女らしいといえは彼女らしい。

ただ、どれだけ努力しようとも彼女の運動神経はそれに応えてくれず、少しでも考え事をしながら歩けば、必ずと言っていいほど転じた。

そんなヘステイを整備士たちが女神のごとく崇めるようになったのは、軍属ではあっても軍人ではない彼女の見せる柔らかな笑みに魅せられたからだろう。転げる姿が可愛いという意見もあるが、それは一応少数派だった。

「博士！」

ぐっ顔を寄せてきた筋肉ふたりに「ひっ」と小さく悲鳴を上げるヘステイ。彼女を心配して集まってきた整備士たちの中に、このままでは泣き出すのではないかと心配する者が現れはじめた頃、集団に向かって静かな、だがしっかりと芯の通った声が浴びせられた。

「何をしているか」

ざざっと人垣が割れ、整備士たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。しかし、筋肉のふたりはその場に留まったままだ。

彼らは声の主に向かって白い歯を見せた。

「バーバンティ閣下！」

「フリーガシン博士を医務室にお連れするところです！」

ふたりの暑苦しい笑いにも、その人物は表情を変えない。
 真新しい階級章は准将のもの。襟元の所属兵科徽章は参謀科のそれであるが、胸の機兵
 操縦技能徽章から、彼女が機兵科参謀だと察せられる。
 イレスティア・バーバンティ。この地の自動人形部隊の作戦行動を立案する主席機兵参
 謀だ。

「博士はわたしがお連れしよう。貴様らは仕事に戻れ、それと作業衣はきちんと着るように」
 イレスティアの口調は平坦で、機械が発する自動音声のようにも聞こえる。だが、慣れ
 ているふたりにとってはそれほど奇異なものではない。

「はー」
 「博士が転んでから脱いだので問題ありません！ 失礼します！」

ふたりが敬礼し、担架を肩に担いで走り去ると、イレスティアはヘステイに手を差し出
 した。

「立てますか？」

「ええ、大丈夫です」

ヘステイは彼女の手を取り、立ち上がる。白衣の尻の部分に黒い機械油の汚れが付いて
 いたが、それもいつものことだ。

「そろそろ昼食の時間ですし、ご一緒にどうかと思ったのですが……」

イレスティアはそう言って、ヘステイの顔を窺う。

「あ、それは……」

「ご予定があるのなら、無理にとは申しませんが」

「いえ！ ご一緒にさせていただきます！」

ヘステイは慌てて一礼し、再び足を滑らせた。

イレスティアが支えなければ、再び筋肉の壁がヘステイの前に現れていたかもしれない。



ヘステイ・ラ・フリーガシンが特機研から〈ウィルマグス〉での試作機性能試験の指揮
 を命じられたのは、北の地の長い冬がようやく折り返し地点を迎えた頃だった。

彼女は新たに建造された、影型と雲型をそれぞれ四機預けられ、つい一年前は帝
 国領だったこの〈ウィルマグス〉にやって来た。

旧帝国領——皇国での俗称で呼ぶならば北方辺境領——にはすでに皇国式の鐵路が敷
 設されており、〈パラティオン要塞〉を横目に山脈を打ち通す隧道も完成している。ヘス
 テイが準備に疲れて眠っている間に、彼女を乗せた軍の装甲列車は〈ウィルマグス〉に到
 着した。

そして、彼女の忙しい日々が始まったのである。

「どうでしょう。あまり華美な場所は好まれないと聞きましたので、佐官用の個室を用意いたしました」

基地内部の士官食堂区画、その一角にある個室で、ふたりは向き合って座っていた。

すでに食卓の上に並んでいる様々な料理が、ヘステイの胃袋を視覚的、嗅覚的に刺激している。

「ええ、ありがとうございます」

感情の窺えないイレステイアの言葉に、ヘステイは辛うじて愛想笑いを浮かべて礼を言った。しかし、気遣いそのものに限れば、この上なく心嬉しいものだった。

これまでは、情報管理上の問題もあって将官用の食堂を借りることがほとんどで、日によっては軍の高官との会食にも同席しなくてはならなかった。

自らを平凡な一研究者だと思っているヘステイにとって、ここでの生活は気の休まる暇もない、と評するしかないものだった。

「ただ、研究一辺倒の不調法者ですし、將軍のお気に障ることもあるかも、と」

「お気になさらず。わたしも軍務一筋で、格式張った食事の作法も最近ようやく覚えただけです」

イレステイアが口の端をほんの小さく動かし、僅かな笑みを見せる。

ヘステイはそれを見て驚いたが、辛うじて動揺を抑え込んだ。

「お互い、仕事が生き甲斐ということですか」

「ええ」

ふたりは笑みを交わし合ったあと、短刀と突き匙を手にして食事を始める。

軍組織には似合わないほどの美味で知られる皇国軍の、さらに賓客用の食事ともなれば、皇都の一流高級食堂と較べても遜色はない。あまり料理の味に頓着しないヘステイでさえ、ここでの食事には驚かされたものだ。

皇国軍給養將兵の基軸標語は、『美味こそ最強』であり、美味しい食事は如何なる兵器よりも強い破壊力を持っていると、彼らは固く信じていた。

他国の軍に『皇国軍の捕虜になったら最後、二度と祖国の食事は食べられない。それは殺されるからではなく、祖国の食事の味に耐えられないからだ』と言われるほどに、皇国の料理の質は広く知られていた。

「美味しい……」

前菜として供された乾酪の燻製肉巻きを口に入れ、ヘステイは無意識に咬みかじっていた。塩気のある乾酪と僅かな苦みのある燻製肉が、口の中で互いの欠点を打ち消し合い、長所を伸ばし合っている。

食材の組み合わせそのものは、酒肴しゅこうとして一般的なものだが、それを徹底的に昇華しょうかさせれば、こうして高級な料理のひとつとして存在感を示すことができるのだ。

「これは我らが中将閣下が好んでおりまして、給養兵にもよく作らせているのです。わたしも何度か相伴ともなひに与ることがありました」

「中将閣下というと、ラグダナ閣下？」

「はい」

ヘステイは皿の中の料理を見つめ、摂政せいていの信頼篤あつい良将の顔を思い浮かべた。この地に来た当日、彼女を出迎えたのが彼だった。

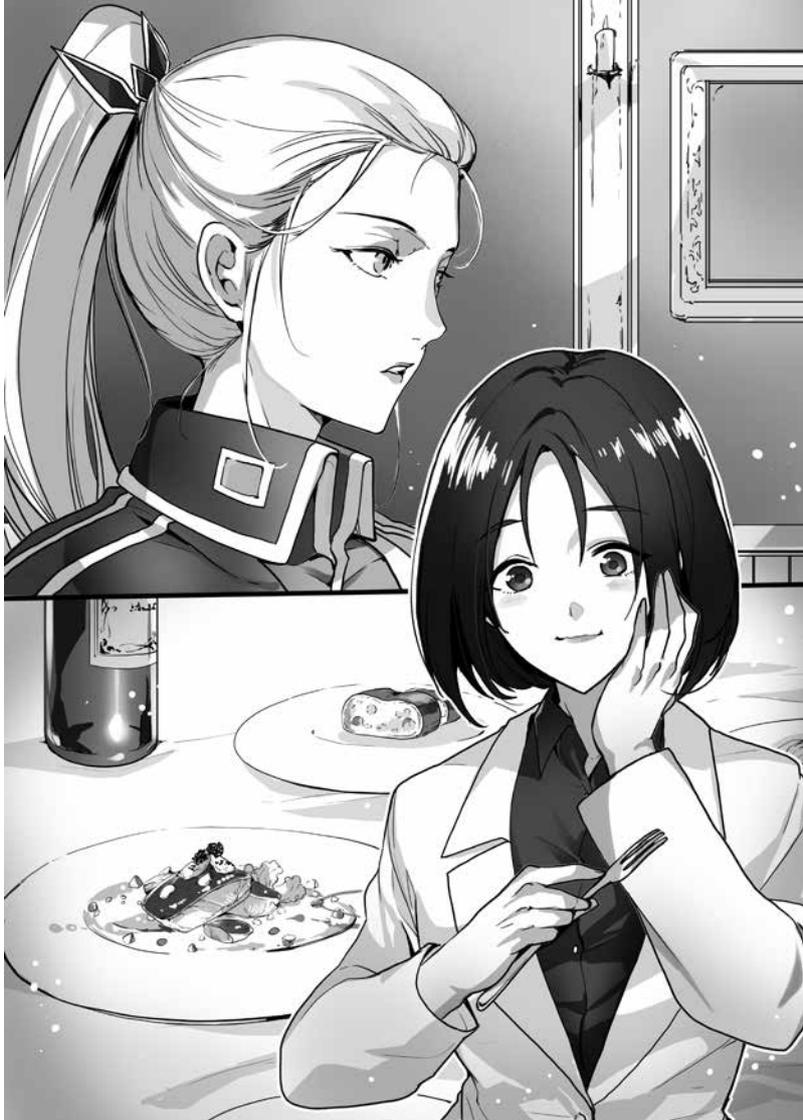
普段は（パラティオン要塞）と（ウィルマグス）を行き来しているという彼だが、ヘステイが来訪する予定に合わせて（ウィルマグス）に留まっていた。

ガラハ・ド・ラグダナは技術者であろうと芸術家であろうと、己が敬意を示すに足る相手たには礼儀れいぎを貫くのだ。

ただ、その敬意が摂政レクティファールに対してはあまり見られず、それが彼のもとで働く者たちを悩ませていた。

レクティファールを信頼していないわけではないわけではない。主君としてはこれ以上ないほど信頼している。だが、そこに敬意が伴っていないように見えるのだ。

これがある種の「戦友」に向ける気安さが先に立つ信頼であることは、ガラハ本人でさ



え気付いてないのかもしれない。

「わたしたち司令部の者たちも、色々意見を取り入れてもらっています。今日の主菜も確か、司令部の誰かが考案した鶏肉の照り焼きだったと思います」

「それは楽しみです」

軍人というのは、保存食か、酷い味が濃くて脂っこいものばかり食べていると思っていたハステイにとって、イレスティアの口から語られた事実は驚きを喚起するものだった。

もしかしたら自分たちの方がよほど身体に悪いものを食べているかもしれない、と心配になるほどだ。

ただ、ハステイの先入観は皇国以外の軍であればおよそ間違った認識ではない。皇国が異常なまでに戦場での糧食に拘っているだけなのだ。

種族ごとの食事を研究する必要があり、研究が医学的側面を内包するようになり、そして医学的側面の中に精神医療が含まれるようになった結果、今の皇国軍の食事を武装の一種と看做す風土が作られた。

その点で言えば、ハステイが今口に連んでいる料理は、彼女が研究開発する自動人形と同じものだった。

「それで、試験の方は如何ですか？」

食事が進み、檸檬の味と香りが付いた微炭酸水で、口の中にある後味を雪いだイレステ

ィアが、そうハステイに訊ねた。

この質問こそ食事の本来の目的だったが、イレスティアはそればかりを優先するほど融通の利かない性格の持ち主ではなくなっていた。一年前の彼女であれば、格納庫での質問をしていただろうが。

「順調です。研究所が想定した通りの進捗状況です」

そもそも特機研が北方での運用実験を決めた背景は、ここが皇国内でもっとも戦いの頻度が高く、それに伴い諸装備を運用するための蓄積情報も、兵士たちの経験も、多かつたからだ。

また、以前なら「パラティオン要塞」近傍での試験になっただろうが、今では「ウイルマクス」周辺での各種実験も珍しいことではない。

要塞という、それそのものが兵器と言っても過言ではない場所よりも、「ウイルマクス」のような都市に隣接した基地の方が、実験場としては適している面が多いことも事実だった。

面積的なものから、実験に参加する民間人の受け入れまで、要塞にはそういった余裕はあまりなく、拡張性という点で都市型軍事基地の方が有利なのだ。

「各国の武官も色々気になってきているようです。断っているとのことでしたが、各方面から見学の申し込みが届いているらしいですよ。裏では色々動いているかもしれませんね」

イレスティアは、基地の事務方からの情報を思い出し、内心苦笑した。そういつた情報からでさえ、専門の教育を受けた情報官は、多くの情報を抽出することができる。申し込んできた人物の中に各国の情報機関員が含まれていることも、さらにそこには裏の世界で大いに名を馳せた人物が含まれていることも、皇国側は掴んでいた。

こと情報の分野において、無駄になるものは存在しない。無価値であるとされた情報でさえ、『無価値』という価値を与えられているのだ。それに、価値がない情報を別の情報と重ね合わせることで、新たな情報が浮かび上がる場合もある。ありとあらゆる可能性を比較し、精査すれば、そこには別の世界が広がる。その世界では、ほんの一行の文字が万金の価値を持つのだ。

「大丈夫なのでしょうか？ わたしが持ってきた機体は、二種とも機密の塊ですし……」
 「それについては、わたしたちと、然るべき部署に任せていただく他ありません。ただ、博士が危惧するような事態にはならないと信じてします」

ヘスティは、イレスティアの言う、然るべき部署、というものが何であるのか知らなかった。彼女自身がその、然るべき部署の人員に常に監視されていることも、当然知らなかった。そして、これからも知ることはないだろう。

「ただ、最後の試験だけは見学者を入れて行うとのことです」

「最後の試験……屋外での運動性試験を？」

「はい。各国の武官を招いて、それと非公式ではありますが、摂政殿下も臨席されるかもしれないと」
 ヘスティは目を丸くした。

「だからこそ、この地が選ばれたのかもしれないですね」
 イレスティアはそう言って、主菜の鶏肉に短刀を刺し入れた。

何故皇国が新型自動人形の試験を公開するのかと言えば、多分に政治的な判断だった。

皇国どころか、世界的に見ても画期的な機構を持つ新型自動人形である。それを衆目に晒すことで自国の防衛力を誇示するのは、自動人形のみならず、総ての兵器に当てはまるまっとうな使用方法のひとつだ。

秘密兵器などというのは、所詮空想に過ぎない。それほど防諜技術が進んでも、情報とは漏れるものである。それでも漏れないように努力し、それ以上に漏洩を制御することが重要になる。

皇国は先手を打ち、最終試験には諸外国の駐在武官を招くことを決定した。その中には、帝国領（アクィタニア王国）の駐在武官も含まれていた。

この武官は、帝国内部では（アクィタニア王国）が独自の判断で送り込んだものということになっているが、実質的には帝国政府が派遣した武官と言っている。

皇国を対等な国家として認めておらず、属州として扱っている以上、帝国政府が駐在武

官という名目で武官を派遣することはできない。しかし帝国内部の国家同士であれば、駐在武官を視察名目で派遣しても問題はないという判断だ。

子どもの言い訳じみたあまりにも稚拙な遣り取りだが、それも必要なことだった。

結局のところ、国家が行う総ては政治に行きつく。

ヘステイたち研究者が政治的意図を持っていなくても、組織というものは常に政治力学の当事者であることを強いられるのだ。

だが、そこに善悪はない。冷厳とした現実があるだけだ。

「今日こうして一緒に食事をさせていただいたのは、先ほどの話ともうひとつ、個人的にお伺いしたいことがあったからです」

最後の甘味を食べ終え、熱い紅茶を飲みながら、イレステイアは口を開いた。

ヘステイは何度も紅茶に吐息を吹きかけていたが、イレステイアの表情にこれまでとは違う感情を見て、居住まいを正した。

「博士が研究しているあの新型。新しい操縦機構を積んでいますね」

「ええ、影型^{かげがた}の半分が、新型の運動追従方式^{うごきおそい}を搭載しています。残り二機は、既存の操縦系統^{そうじゆうけいとう}ですが……」

別の操作機構^{そうさくきこう}を搭載しているのは、それぞれの操縦方式を比較し、問題点を洗い出された。めだ。

操縦管制官の身体の動きに追従する方式では、管制官の運動能力がそのまま機体の能力に直結する。それに対し、既存の操作方式は管制官の直感が機体の性能を左右する。

どちらが優れているかはまだ分かっていない。

追従方式のために優れた運動能力を持つ兵士を集めたところで、未だに魔導筋繊維技術^{まどうきんせんい}そのものが発展途上にある以上、彼らの身体機能を完全に再現することはできない。

それに対し、すでに選抜方法^{せんぱくはうほう}から訓練方法まで確立されている既存の筐体型^{かうたいがた}の操縦方式は、軍が本能的に好む安定性に富んでいる。

しばらくの間、このふたつの操縦方式は併存^{へいぞん}することになるだろう——ヘステイは、イレステイアにそう答えた。

「なるほど、やはりそう簡単に新しい技術は生まれませんか」

「ええ、残念ですが、向こう二十年は試行錯誤^{しこうそご}のままでしょう。あるいは、運用目的別に併存^{へいぞん}し続ける可能性もあります」

皇国は他の国に較べれば柔軟な考えを持っている。新しい兵器を受け入れる土壌もあるし、失敗を受け入れるだけの余裕もある。

それでも、技術の進歩は一朝一夕に済むものではない。

「博士、ひとつ空想の話をしてよろしいですか？」

イレステイアはヘステイの目をじっと見つめ、訊いた。

「——ええ、もちろん」
「ありがとうございます」

ヘステイは、イレステイアの話す事柄が単なる空想ではないと分かっていた。だが、空想で済ませておくべきことも世の中にはある。

「今回の新しい操縦方式、そこには新しい通信技術も含まれていますよね。亜空間経由の無時間差通信」

「はい。たとえ通信波が光の速さでも、無線で通常空間を通過させると、送受信と解析にどうしても時間がかかります。ですが、圧縮した情報を転移魔法の術式を用いて送受信できれば、その時間は限りなく圧縮することができます」

自動人形の技術の発達は、そのまま人形たちの運動性能を向上させた。そして向上した運動性能は、操縦者に命令伝達の高速度を要求する。

新たな通信技術として、空間を超える技術が見出されるのは当然の流れだった。

「では、思考を直接人形に送り込む方法なら？」

「黎明期に存在した傀儡人形の操作方法ですね？ 術者の技量に左右されることが多かったため、結局は機械による操作方式に淘汰されてしまったという……」

ヘステイも、自動人形の始まりについては多くの研究資料を読み漁ったものだ。祖父の書斎には、そういった資料も多く揃っており、弟とともに絵本代わりに読んだ。

「あれは魔導師の使い魔と同じようなものでしたから、自動人形の操作方法としてはあまり適していなかったでしょう。ただ、人形と一体化するという点は、影型の操縦方式に似ているかもしれません」

「わたしも最初に新型の話聞いたとき、同じことを思いました。人形がヒトに近付いているのか、それともヒトが人形に近付いているのか。そう悩んだこともありまし」

「研究者の立場から言わせてもらえらるなら、わたしたちはただひたすらに〈装甲機兵〉を目指しているに過ぎません。ですが、それを目指していくと、あるいはヒトへも近付くのもかもしれません。人工知性を搭載した自動人形というのも、ここ十年ほどで現実味を持ちはじめましたし……」

総ての自動人形の雛形である〈装甲機兵〉。

操縦者と同化し、強大な力を振るう神の模造品。それを目指し、様々な国家や集団が叡智を求めた。

研究の集大成として自動人形が生まれ、その自動人形は神ではなくヒトに近付いている。「いずれ、ヒトと同じ心を持つ自動人形が生まれるかもしれません。そうなったとき、わたしたちは果たして彼らの造物主足り得るかだろうか」

ヘステイは、特機研が祖父の代から研究し続けている人工知性の存在を思い浮かべた。今は機人種などが行っている各種兵器の動作補助を担う、ヒトと同じ思考を持った人工

の知性体の研究。人的資源の乏しい皇国が悲願とするその研究は、ようやく幾つかの実験体を構成するまでに至った。研究の根幹を占めているのは、精神情報生命体である神々の生体だ。ヒトは神々を模倣し、新たな神々を創ろうとしているのかもしれない。

「造物主……わたしにはどうしても、否定的な印象しかありませんね」

イレスティアが僅かに頬を歪める。

苦笑だった。

作られた存在である自分たち機人族と同じような境遇の存在は、これからも生まれ続けるだろう。

そう考えても、苦笑を浮かべるだけで心が平静を保っていられるのは、この国がそれらの生命体さえ、生まれが違うだけの同胞だと結論付けると予想しているからか。

「ずっと未来では、物質の身体を持つヒトと、情報の身体を持つヒトが、兄弟姉妹として生きているかも……」

ヘスティは自分の言ったことを想像し、口元に手を当てて笑った。

そういった存在はこれまでもいた。それどころか、今現在の皇国には神族とそれ以外の種族の兄弟というのも珍しくない。

「そんな存在が当たり前になれば、わたしたち機人族もようやく本当の意味でヒトになれる」

「本当の意味、ですか？」

ヘスティには、イレスティアの言葉の意味が理解できなかった。

機人族はヒトである。これは皇国での常識であり、そこに疑いを挟む者はほぼ存在しないと言っている。

だが、機人族たちからすれば、自分たちとその他の種族の間に、確かに壁が存在した。

「わたしたち機人族は、基本的に能力を生かせる職業に就きます。軍の管制官、官庁や民間の情報管理官などです。わたしたち以上に情報の扱いに長けている種族は、おそらく機族や一部の神族ぐらいでしょう」

そして、種族としての絶対数は機人族が残り二種族を遙かに上回る。

機人族は皇国にあつてなお、生まれの軛から解放されたわけではないのだ。

「この種族に生まれた瞬間、ある程度将来が定められる。最近、そんな現実を変えたいと思うようになりました」

彼女がそう思いはじめたきっかけは、帝国軍に属していた同族の子どもたちを養育するようになったからだだった。

子どもたちは今皇国の初等学校に通っているが、学校の教師たちは子どもたちがいずれ自らの技能を生かした職業に就くものと思い、イレスティアにそれに適した教育を行うかどうかの確認をしてきた。

自らの技量にあつた職に就くこと自体は、機人族に限らず、他の種族でも見られることだ。潮流ナガリを本能的に感じ取ることでできる海洋系水棲種族であれば、海洋研究者や航海技術者、あるいは海軍軍人。

翼を持ち、飛行能力を保有する種族であれば、流通業者や通信業者が優先的に求人を求めているし、地下の鉱脈を探る能力を持つ岩窟小人ドワーフ小人や地下妖精ローヴェルブは鉱業商会などに就職することが多かった。

そういった種族は、もともとそれらの仕事に従事することが多く、中には古来からの伝統として定着している種族もあった。

だが、彼らは自ら進んでそれらの道を選んだ。自分たちが生きるために、もつとも得意とする生業なまひを選ぶのは自然なことだからだ。

一方、機人族などの人形種は、役目を果たすために創られた。まず就くべき役目があり、次いで役目に適した能力を与えられ、その後れつとうかんに生み出された。

それは、人形種たちにとつてある種の劣等感となつている。

存在するから役目があるのではなく、役目があるから存在する。役目がなくなつたとき、果たして自分たちの存在に意味はあるのか。

多くの人形種が皇国で暮らすうちに忘れ、しかしふとした瞬間に思い出す、本能的な他種族への劣等感であつた。

「役目ではなく、ただそうありたいと願うには、我々は無知でありすぎる。ですから、我々が知らないことを知るための機会を得たい。――一介の軍人が語るには大それた話ですが」
イレスティアは言葉を切り、ヘスティアの表情を窺う。

同僚たちにも語つたことがない夢を口にしたのは、ヘスティが機人族の未来を変えることのできる立場にいるからだ。

打算だと言われれば、確かにその通りだろう。しかし、受け止める相手次第で、打算は期待へと姿を変える。

「そんな！ 素晴らしいことじゃないですか。わたしがその助けになるといふなら、お手伝いさせてください」

ヘスティは表情を輝かせ、両手を叩いた。

自動人形の研究は、重要性に反して人々に受け入れられているとは言いがたい。大半の者たちが自動人形を兵器だと認識し、ヘスティたち研究者を「死の研究者」だと思つている。彼女たちを嫌う者も決して少なくはないのだ。もつとも、自動人形がらみで嫌われるのは、彼女たち研究者だけではないのだが。

「ありがとうございます。博士のようなご高名な方に助けていただけるなら、心強い限りです」

「いえ、そんな……」

ヘステイは照れたように顔を伏せ、曖昧な笑みを浮かべた。イレステアの言葉が心からのものだと分かったからだ。

いつまで経っても、他人から褒められるのは慣れない。ヘステイは心の中でそう思った。「でも、やはり若くして將軍となられただけあって、広い視野をお持ちなんですね」

イレステアは今年で三十六歳になる——ということになっていた。機人族に人としての権利がない帝国出身であるため正確な生年月日がわからず、保護当時の姿勢好や知識の習得度を基準に年齢を当てはめており、最大で二程度程度の誤差があると言われていた。

ただそれでも、イレステアの年齢で将官になるのは簡単なことではない。

幼少期から高等教育を受け、入営時にはすでにそれに見合った種々の国家試験に合格している貴族は、軍の昇級基準上、比較的昇進が早いと言われているが、そんな彼らでも将官への昇進は困難なものだった。要求されている知識と経験が、恐ろしいほど深いのである。最上位の貴族である四公爵家のひとり、フレデリックでさえ当主就任が決まって予備役に編入されたあと、六年間騎士学校に缶詰にされてようやく将官になったほどだ。

部下たちを効率的に消耗させることのできない指揮官など必要ない——軍の昇進基準の大前提である。

「中将閣下は何度も推薦していただいてようやくですから、それほど大したことはありません。むしろ、中将閣下ご自身が何度も昇進を免れている方をどうにかしてもらいたい

のですけどね」

目だけで苦笑するイレステアに、ヘステイは驚いた。

「え？ 確か軍で昇進を断るなんて不可能だと……」

彼女の属する特機研に始まり、皇立と名の付く組織や皇国政府管轄下の組織において、人事命令に口を出すことは許されていない。

それはその命令が名分上、皇王の勅命であるからだ。当然のことながら、異動なども含めて命令拒否はありえなかった。

事前に一年以上の調査期間があり、その間に本人への聞き取りもあるため、問題があればそもそも命令が下されることはない。たとえ勅命であろうとも、命令が出る前なら断ることはできるのである。

ただ、昇進に関しては軍の都合が最優先されるため、本人への調査が行われないこともある。

本人に内示される場合、それはすでに皇王の意向であるとされてしまっていることも多いのだ。こうなると、内示内容が誰かの生命財産に関わるということにでもならない限り覆らない。

そういった事情から、ガラハは事前に情報を掴んでは、昇進の機会を潰して回っている。軍内部での検討段階で、軍の都合に合わせた人物を代わりに推挙するのだ。そうするこ

とで、自分自身の昇進をなかつたことのできる。

「ああ……あの噂（うわさ）ってラグダナ閣下のことだつたんですね」

妙に納得したように頷（うなず）くヘステイに、イレステイアは内心羞恥（しゆうぢ）心が疼（うず）くのを感じた。

どの組織でも、頑（かた）なに昇進（しやうしん）を拒（こ）む者がいる。

たとえば、空軍にいる皇妃候補（こうひこうほ）メリエラの兄（あに）エーリケは、直接（じやくせつ）摂政（せつせい）レクティファールに

手紙を送り、自分の価値（かち）を延々（えんえん）と説明（せつめい）し、昇進（しやうしん）によってそれが妨（さまた）げられると説明（せつめい）している。

皇王（すうおう）の意向（こうおう）——この場合は摂政（せつせい）の意向（こうおう）が示（し）される前（まへ）に対処（たいじゆ）している形（かたち）だ。

優れた研究者（けんきゆうしゃ）も、昇進（しやうしん）することによる研究（けんきゆう）以外の仕事（しごと）の増加（ぞうか）で、研究（けんきゆう）の時間（じかん）が減少（げんじゆ）し、

結果（けつこ）として本来（ほんらい）皇国（すうこく）にもたらされるはずの利益（りやく）が減少（げんじゆ）する、という旨（ねらい）の陳情書（ちんじやうしょ）を提出（ていしゆ）することがある。

実際にヘステイの祖父（そふい）はこれを行（おこな）つており、以後（いご）は実務（じつむ）がほぼ存在（そんざい）しない名誉職（めいよじやく）のみを受任（じゆじん）することになった。

なお、これは本人（ほんにん）に限（かぎ）つた話（わ）ではなく、その人物（にんぶつ）の才能（さいのう）を買（か）っている同じ研究者（けんきゆうしゃ）が陳情書（ちんじやうしょ）を提出（ていしゆ）するときもあつた。

「わたしの祖父（そふい）や、今の名管理（なかんり）理事（りじ）の方も何人（なんにん）かは同じようなことをしていると聞いています。ご苦労（ごくろう）なさつたんですね……」

ヘステイは少し遠（とほ）い目（め）をした。

代わりに、彼女（かのじよ）が様々な肩書（かたがき）を押し付けられてきたのだ。幸（さい）いなことに研究（けんきゆう）に支障（しざう）のないものばかりだが、そろそろ自分（じぶん）も弟（あに）に押し付ける時期（じき）が来た（き）のかもれないと思う。

そもそも、この地（ち）への出張（しやうちやう）も、彼女（かのじよ）の上（うへ）にいる主席（しゆうせき）研究員（けんきゆういん）が自分の研究（けんきゆう）のために断（ことわ）つたから、彼女（かのじよ）にお鉢（おぼし）が回（まわ）つてきたのである。弟（あに）も道（みち）づれにしよう（と）試（こ）みた（が）、弟（あに）は近（き）場で短期間（たんきかん）の出張（しやうちやう）という荒（あ）れでそれ（を）撥（は）ね除（の）けた。

（あんにやろー——お土産（みやげ）は毒（どく）蝮（ぶ）蛇（へび）の干物（かんぶつ）にしてやる！）

心（こゝろ）の中で独語（どご）したヘステイは、少し困惑（くわんごつ）した様子（ようす）のイレステイアに視線（しせん）を向（む）けた。

まさか自分（じぶん）と同じ苦惱（くなん）を抱（かか）えているとは思（おも）わなかつたらしい。

「どこでも似た悩み（なやみ）があるものですね……」

機人族（きにんぞく）の将軍（しやうぐん）は半（なか）ば呆（あ）れ気味（きみ）に呟（つぶや）いた。自分（じぶん）の上（うへ）司（し）のような人物（にんぶつ）が各地（あちこち）に存在（そんざい）していることに戦慄（せんりつ）さえ抱（かか）く。

ただ、それと同じように各地（あちこち）には本業（ほんごう）と同じだけ人物間（にんぶつかん）の調整能力（ていせい能力）に優れた人々（ひとびと）もいる。そういった人物（にんぶつ）が組織（そくし）の責任者（せきにんしや）や責任（せきにん）ある調整者（ていせいしや）となり、組織（そくし）を運営（うんえい）するのだ。

ガラハの率（ひら）いる北方（ほくぱう）国境（こくけい）守備軍（しゆびぐん）ならば、参謀長（さんぼうちやう）の少将（せうしやう）がその任（にん）を負（お）っている。各方面（あちこち）への調整（ていせい）に走り回（まわ）る参謀長（さんぼうちやう）の姿（すがた）を見てきたイレステイアは、自分（じぶん）にはとても真似（まね）できないと思（おも）っていた。

「ま、まあ、仕事（しごと）の話（わ）はこのあたりで……」

ヘステイは、これ以上この話題を続けることの危うさを感じ取り、話題の転換を図った。現在の特機研総所長グルーツの顔が浮かんできたのだ。

研究者として特機研に所属していたのに、能力はあるが癖の強い他の研究者たちに上級研究員に推薦され、さらに研究所主席研究員、総主席研究員と昇進していき——最終的には、研究所の運営を司る理事になった途端、前任者と名譽理事たちによって総所長に推挙、就任させられた。

イレステイアの言葉通り、どこにでも加害者と被害者はいるのだ。

「ええ、そうですね。では……」

ヘステイの内心を察したのか、イレステイアは新しい話を考える。以前までの彼女ならば気付かないか、気付いても何ら考慮することのなかったであろう他人の感情の機微だが、今のイレステイアはすぐに対応することができる。

口調も柔らかくなり、時折見せるほんの僅かな笑みの効果もあって、今では彼女を慕う部下たちも多い。

部下たちの一部が、イレステイアがたまにやる子どものような仕草に心を射貫かれていたことは、北方守備軍の重要な秘密だった。

「ああ、そういえば博士を知っている部下から聞きましたが、もうすぐご結婚なされるそうで、おめでとございます」

「ふあっ!?」

ヘステイは奇声を上げ、持っていた磁碗を受け皿に落としてしまった。

ほとんど中身が残っていなかったために惨事にはならなかったが、イレステイアは目を見開いて立ち上がろうとする。

「博士！ 大丈夫ですか？」

「ええ、ええ、大丈夫です！ ちょっと驚いてしまっただけで……!」

「それなら良いのですが……」

イレステイアは、ヘステイがこうも大きな反応を示すとは思っていなかった。

自動人形好きで、模型などを集めている部下が以前からヘステイを知っており、自動人形愛好家たちの間で広まっているその噂をイレステイアに話したのだ。

噂の出所は特機研内部のヘステイに近いところからだ、イレステイアは推測していた。しかし、その程度の考えを巡らせるだけの余裕さえ、今のヘステイには全く存在しなかった。

ヘステイは呼び鈴で呼んだ給仕に新しいお茶を淹れてもらい、給仕が去ったあととほそれ口にしながらちらちらとイレステイアを窺っている。

(もしや秘密の交際だったのか？ なら悪いことをしてしまったな)

イレステイアはヘステイの反応をそう解釈した。

「噂で聞くヘステイの相手は、自分と同じ陸軍の軍人であり、あの帝国との戦いにも参加していたと聞き、ならば話の種にちょうど良いと判断したのだが、失敗だったかもしれない。大丈夫です。ここでの話は外に漏れるようなことはありませんし、わたしも聞かなかつたことにいたしますので……」

「いえ、そういうわけではなくてですね……!!」

焦つたように両手を振るヘステイに、イレスティアは困惑した。

顔を真っ赤に染めたヘステイを見て、自分は礼を失したことを言ってしまったのかと焦つた。

幼少期から友人というものを持たず、人付き合いも非常に限定された範囲で行ってきたため、情思に起因する他人の反応を十全に理解できないのだ。

ただ、ヘステイが抱いている感情そのものを理解できないわけではなかった。

「あれは上司が勝手に色々やったことで、でもお礼を言っておしまいとか失礼かなって思つてるだけで、手紙ならそんなに迷惑にはならないかなーって」

「は、はあ……」

イレスティアは、ばばばと空気を斬り裂いて手を振るヘステイに、適当な相槌を打つた。下手な反応は被害を拡大させてしまい、確なことになると思つたからだつた。

「でも最近忙しいらしくて、返事の消印がもの凄く遠くだったりすることもあって……」

「な、なるほど」

「この前なんて、南洋のどつかなんか凄く珊瑚礁が綺麗な島から絵はがきで返事が届いて、でも仕事で来てるから観光とかはできないって言つてて」

ヘステイの両手も口も止まらない。

自分が何を言っているのか理解していないのかもしれない。

「弟も最近酷いんですよ。前に、官舎に戻ったら『出張多くても、研究室に籠もりきりの姉貴には逆にちょうど良いだろ』って、思い出したら腹立たしい!」

「ほー」

そこでようやく、イレスティアの表情に気付いたららしいヘステイ。爆発的に頬を染め、風船が萎むように身体を縮こませた。

「すみません……」

蚊の鳴くような謝罪の言葉。

「いえ、お気になさらず。誰かを想うのは決して恥ずかしいことはありません」

一年前の自分が今の自分を見たら、おそらく思考機能に障害が発生したと思うだろう。

それほどまでにイレスティアは変わった。

他人の感情を理解しようと努め、拙い理解からでも相手を気遣うことができるようになった。

それは間違いなく、イレスティアが兵器としての機人の枠組みから抜け出そうとしている証拠だ。

(そう、許されるならばわたしも……)

保護した子どもたちの現状を、恩人であるレクティファールに伝えたい。

機人族の子どもたちは、最近になってようやく、ヒトが本来持つべき感情を取り戻しはじめた。最初は困惑と怯え、続いて悲しみと怒り、それらを経てようやく喜びという感情を思い出した。

そしてイレスティアもまた、レクティファールという存在によってある感情を取り戻した。

時折感じる胸の痛みも、自分の過去を思い出すたびに感じる苦しみも、その感情によって引き起こされている。

彼女の同僚たちはそれを思慕だと言う。堅物の機兵参謀にもようやく春が来たのだと喜んだ。相手が国の頂点に立つ者であろうとも、それを否定する理由はこの国にはない。

一方的に完結する話ではないため、イレスティアの想いが叶うかどうかは分からないが、イレスティアを大事な同僚だと思っているからこそ、彼らはそう考える。

(ああ、わたしもこの人のように生まれていれば……)

イレスティアは目を細め、ヘスティアを見る。

生まれ持った資質を最大限に發揮している点に違いはない。ただ、生まれた環境が違っただけだ。それだけで、生き方も死に方も変わる。

「博士の想いが成就することを願っております」

自分の言葉に再び頬を染めるヘスティアを見つめながら、イレスティアは軍装の上から自らの身体に刻まれた醜い傷痕をなぞった。

古傷の痛みより、胸の奥底が軋むような痛みの方が辛かった。



「うーん、やっぱり現役の軍人さんは凄いな」

ヘスティアは宿舎に戻って湯を浴びたあと、研究所に送る報告書を認めていた。

最低一日に一度、多ければ日に二度三度と送ることのある試験報告書だ。

これを、ヘスティアが持ってきた暗号化装置に掛けて全く別の文章に変え、それを軍の係官に渡せば、軍用暗号通信で特機研に送られ、そこにある固有暗号解読器付きの印刷機で出力される。

ヘスティたち特機研の研究者たちの宿舎が警備兵によって固められているのは、警護はもとよりヘスティの持つ暗号化装置を守る意味もあった。

「あ、レクトさんにも手紙書かないと」

文机に座り、髪を纏め、ヘステイは私物の便箋を取り出した。

機鉄筆に墨字を入れ、いつも通りに『勇敢なる友人レクト・ハルベルンへ』と書き出す。「とりあえずバーバンティ將軍のことは書いておいた方がいいよね。一緒に戦ったことがあるって言ってたし」

——レクト・ハルベルンという名前は、イレスティアも記憶していた。

無論、それは摂政レクティファールの偽名という意味ではなく、帝国との戦いで活躍したウィリアム・ハルベルンの弟としてだ。ただ、前線で活躍した者の中にその名前があり、義理とは言えさすが国内外に名の知られた名門騎士家ハルベルンの男だと思っていた。

「あと、新型の名前が決まったって教えてあげないと」

〈雲影〉の後継ではあったが、あくまでも試験機であるために、影の一字が付されることはなく、ただ〈霞〉という一字で呼ばれることになった。同じように四脚型も雲の字を与えられず、〈麗〉の一字のみで呼称されていた。

これは、ふたつの文字が摂政によって与えられたものであり、その「ありがたみ」を維持するための方策であったのは間違いない。

証拠として、以降、影や雲の一字は、新型の量産機にのみ与えられることとなり、近い将来には魔導筋織維駆動式の自動人形を示す文字となった。

「他には……」

そういえば、摂政が試験に来るかもしれないと聞いた。

ただ、ヘステイにとつてそれは大した意味を持つことではなく、仕事の邪魔をされなければ構わないという程度の認識だった。

「さすがに摂政云々は……これ書いたら怒られるよね。他にも軍機に引っかけりそうなのはやめておかないと」

すると自然に、ごく個人的な話題ばかりになってしまふ。

たとえば最近、料理をするようになったこと。

たとえば最近、裁縫を習うようになったこと。

たとえば最近、郵便受けを気にするようになったこと。

「つて、最後のは……!」

慌てて文字を消そうと思ったが、墨字は容易に消すことはできない。溜息を吐いて新しい便箋を取ろうとしたとき、昼食を一緒に摂った機兵参謀の姿を思い出した。

あれはまるで、恋する若い乙女のようなことだ。

熱によって相手を見つめ、続いて自分を省みて、己の欠点ばかりが目について仕方ないという表情だ。ヘステイも経験がないわけではない。それどころか、今このときも同じような表情を浮かべているかもしれない。

立ち読みサンプル はここまで